

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 6章3～11節

³それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。
⁴わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。⁵もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。⁶わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。⁷死んだ者は、罪から解放されています。⁸わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。⁹そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。¹⁰キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。¹¹このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

【福音書日課】ルカによる福音書 24章1～12節

(23:56b 婦人たちは、安息日には掟に従って休んだ。)

¹そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。
²見ると、石が墓のわきに転がしてあり、³中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。⁴そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。⁵婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。⁶あの方は、ここにはおられない。復活なされたのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。⁷人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」⁸そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。⁹そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。¹⁰それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちであった。婦人たちはこれらのことを使徒たちに話したが、¹¹使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。¹²しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った。

「復活なさった！」

イースターの朝です。主イエスのご復活を祝うとき、喜びの朝です。

主イエスは、ご復活なさいました。十字架につけられ、死んで葬られましたが、三日目の朝、およみがえりになりました。うつむいて墓に目を向けるときは、過ぎ去りました。ご復活なさった方の生きていらっしゃるところに、わたしたちは、顔を上げて、目を向けます。「ハレルヤ」と主をほめましょう。「主の復活、ハレルヤ」と讃美の歌声を、なお大きく響かせましょう。

子どもたちは、朝一番の礼拝を終えた後、公園で《エッグハント》を楽しんでイースターを祝いました。春の訪れとともに巣穴から出て来る《イースターのウサギ》が産んだ不思議な模様の《イースターエッグ》を探すのです。ただし、今どきの《イースターエッグ》は、昔のような染色をされた卵ではなく、いかにも人の手で準備をされたことがわかる素敵なおラッピングで包まれた卵です。それでも、木陰や草むらに隠された《イースターエッグ》を探し出すのは、楽しくも不思議な経験になるでしょう。

イースターの祝いに、一人でも多くの方をお迎えしたいと願って、ご案内をしてきました。それに応えてくださった方がいらっしゃるならば、うれしいことです。《イースター》は、最近では世間でも知られるようになりました。有名なテーマパークでも《イースター》のイベントをしていますし、普通のスーパーで売っているお菓子の包装でもイースター柄のものが店頭には並んでいたりします。とは言え、《イースター》は、毎年祝う日付けが変わるので、生活の中に浸透するのはなかなか難しいようです。早い年には桜が開花するころに迎えますが、今年は特に遅めの、すでに初夏の陽気を思わせる時期のイースターになりました。新年度、新学期を迎える季節ですから、日程によってはイースターの祝いよりも他のことを優先しなければならない、という方もいらっしゃるでしょう。そのような中で、それでもイースターの祝いへとおいでくださった方がいらっしゃるならば、心から歓迎したいと思います。

一つだけわたしが危惧するのは、「イースターに教会に行ってみただけでも、特別なことは何もなく、面白くなかった」との感想だけを抱いてお帰りになられる方があるのではないかと、ということです。確かに、わたしたちの教会では、イースターだからということで特別なことがあるわけではありません。《イースター・パレード》もありません。ただ、祝いのしるしに《イースターエッグ》が用意され、また祝いの食事会があるだけです。けれども、ここには、《イースターを祝う人たちが》います。《復活を喜び祝うわたしたち》がいるのです。そのわたしたちをこそ、どなたにも見ていただきたいのです。

「主イエスは、ご復活なさいました。死者の中からよみがえられました。今も生きていらっしゃいます。ハレルヤ」と繰り返すわたしたちが、ここにいます。「わたしも、死んで復活された主イエスの命にあずかります」と言って洗礼を受けたわたしたちが、ここにいます。このわたしたちを、見ていただきたいのです。わたしたちの言葉に、耳を傾けていただきたいのです。

主イエスの言葉を思い出す

わたしたちの言うことや生き方が、今は「たわ言」のように思われる方もあるかもしれません。「ハレルヤ」との讃美の歌を聞いても、自分の心は少しも晴れない、と思われている方もあるかもしれません。

それは当然の反応です。「主イエスをご復活なされた、死者の中からよみがえられた」と最初に告げられた弟子たちも、そのような話は「たわ言」にしか聞こえませんでした。

そのことを最初に弟子たちに告げたのは、主イエスの旅に同伴していた女性たちです。男の弟子たちと行動を共にしながら、特に一行の身の回りのことなどを世話してきた女性たちでした。男の弟子たちの中には「使徒」と呼ばれるようになった十二人を筆頭に、主イエスの側近として働いてきた者たちがいました。女性たちも、弟子として従って来ていたのでしょうけれども、「使徒」に選ばれることもなく、どちらかという脇役、裏方に徹してきたのです。そんな女性たちが、主イエスの側近を自認する弟子たちに向けて何かを言っても聞く耳を持たれなかったというのは、仕方ないことだったかもしれません。

もちろん、それ以前に、「死者の中から復活された」という告げられた内容自体が、信じがたい「たわ言」に聞こえたのでしょう。二千年前の人たちだから非科学的で非合理的なことでも信じた、いうことはありません。人間の理性は何万年も前から大して変わっていませんし、人の「死」が不可逆的であることを知っていたからこそ、昔から死者を葬ってきたのです。

けれども、その女性たちの告げのことを「たわ言」のように思って、彼女たちを信じなかった弟子たちが、その後、信じるようになりました。女性たちの告げたことを信じ、自分たちもまた「主イエスをご復活なさいました。死者の中からよみがえられました」と、告げて語るようになったのです。そして、その「死と復活」にあずかる「洗礼」をしるしとして受けるようにと、弟子たちの教会は教えてきたのです。なぜでしょうか。弟子たちは、突然、迷信深くなってしまったのでしょうか。

あの女性たちは、死んだ主イエスが葬られているはずの墓を訪ねて、主イエスのご遺体ではなく「輝く衣を着た二人の人」と出会いました。そして、その人たちの告げる言葉を聞いて、主イエスの言葉を思い出したのです。誤解を恐れずに言えば、彼女たちがそのとき信じたのは、死んだ人間の蘇生ではありません。人の「死」という現実を厳粛に真正面から受けとめ、その事実を認めながら、同時に、その「死」の現実には縛られない真実、「死」の世界に閉じ込められない「永遠の命」の真理を見るようになったのです。「墓には遺体が見当たらなかった」とは、そういうことです。主イエスは死なれました。けれども、《主イエスの言葉》は死にませんでした。墓に葬ろうとして、葬れなかったのです。《主イエスの言葉》は、生きていました。あの女性たちに語りかける言葉として、なお生きていました。いいえ、彼女たちを今生かす言葉として、《主イエスの言葉》は告げられていたのです。

あなたも「輝く衣」を身に着けて

先日、わたしは、叔父が亡くなりましたので、横浜まで葬儀にまいりました。叔父はキリスト信者ではありませんでしたが、本人の生前の願いで、牧師である甥のわたしが葬りの祈りを執り行わせていただくことになりました。若いころからほとんど教会に関わることもなく、ほぼ無宗教を貫き、そのような家庭を築いてきた人でした。それでも、自分の最期のことを、無宗教で済ますのでもなく、世間並みの仏式に収めるのでもなく、キリスト教会の祈りをささげるはずの牧師に託すことを願われたのです。牧師として身内の葬儀を執り行わせていただいたのは初めてで、戸惑いもありました。それでも、どうか役割を果たせたと思えるのは、教会の皆さんが、信者ではないご家族の葬儀を牧師に託してくださることが、普段から少なからずあったからです。

信者ではない方の葬儀を、わたしたちは、どうして行い得るのでしょうか。もしも、「洗礼を受けた信者でなければ天国に行けない」のであれば、わたしたちが行う信者ではない方の葬儀は、その人を「天国」以外のところに送り込むためにしているのでしょうか。そうではないでしょう。わたしたちは、イースターを祝い得る者であるからこそ、信者ではない方の葬儀をも、同じように執り行うことができるのです。「死者の復活」を信じているからこそ、信者も、信者でない方も、同じように葬儀を執り行うのです。

主イエスは、ご復活なさいました。神が、主イエスをよみがえらされました。神が、キリストを死者の中から復活させられたのです。

人は、主イエスを復活させられませんでした。人は、主イエスを墓の中に探したのです。その遺体を求めたのです。たとえ愛する者であっても、死んだ者は死者の中に留めておくことが、残された者にとっては、正直なところ都合が良いのです。良くも悪くも、死んだ者にはもう煩わされない。それが、人の死者に対する態度です。

しかし、「主イエスはご復活なさった」と告げられました。神が、死者を生かされる、死んだ者を命へと引き上げられる、残されたあなたと向き合わせられる、のです。死を越えて、生きた関係を再び回復し、交わりを続けるのです。それが、イースターに「輝く衣を着た二人の人」によって女性たちに告げられたこと、女性たちが使徒たちに告げたこと、です。

考えてみれば、わたしたちは、どれほど多くの人を「葬り去ってきた」のでしょうか。関わりを断ち、「死んだ者同然」に扱ってきた知人が、どれほどいることでしょうか。しかし、死者は復活させられます。墓は開かれ、もはや闇に葬り去ることはできません。神は、「あの人との関係を回復させよう」というのです。

教会の皆さん。あの「輝く衣を着た人」とは、皆さんのことです。洗礼を受けて「キリスト」という「輝く衣」を着せられた皆さんのことです。皆さんが「輝く衣を着た人」として共に立ち、「復活」を告げるところで、イースターが起こるのです。まだ信じていない人の間でも、イースターが始まるのです。

「主イエスはよみがえられました。あなたもわたしも、復活させられます。」